

讃岐国分寺創建軒平瓦の型式学的再検討

渡 部 明 夫

1. はじめに

讃岐国分寺^{註1}・国分尼寺の「創建時」には1型式の軒平瓦が用いられた。国分寺跡のS K H01A～D(第1図)^{註2}、国分尼寺跡のK B 202・203^{註3}の6種がそれである。

昭和58年度から平成3年度まで特別史跡讃岐国分寺跡の北部を中心に実施された発掘調査では、S K H01A～Dについて、文様がA B C Dの順に崩れることから、最も整った文様をもつS K H01Aが最も古く^{註4}、B・Cは「創建時」軒平瓦のなかでも後出的であり、国分尼寺跡のK B 202はS K H01Aの瓦範を彫り直したものである^{註5}との指摘がなされた。

また、S K H01B・Cは国分寺跡の僧坊跡・鐘楼跡から多く出土し、伽藍北部の建物に多く用いられていること、遺構の残りの良い東面築地跡から正格子叩きの平瓦が比較的多く出土すると共に、北面築地跡から正格子叩きをもつS K H01Cが出土し、両者は胎土・焼成から組み合わせが想定できることから、S K H01Cは国分寺の築地にも用いられたとしている^{註6}。

一方、S K H01Cは国分寺・国分尼寺の瓦屋である史跡府中・山内瓦窯跡で生産していたことも確認されている^{註7}。

国分寺跡、国分尼寺跡、府中・山内瓦窯跡では、これらの軒平瓦以外に8世紀代と考えられる軒平瓦は認められない。

しかも、これらの軒平瓦は、全体が時期差をもって変化したと考えられるので、発掘調査の成果とあわせて、讃岐国分寺・国分尼寺の建物の建設順位など、創建時の詳細を明らかにすることも可能となる極めて重要な資料である。

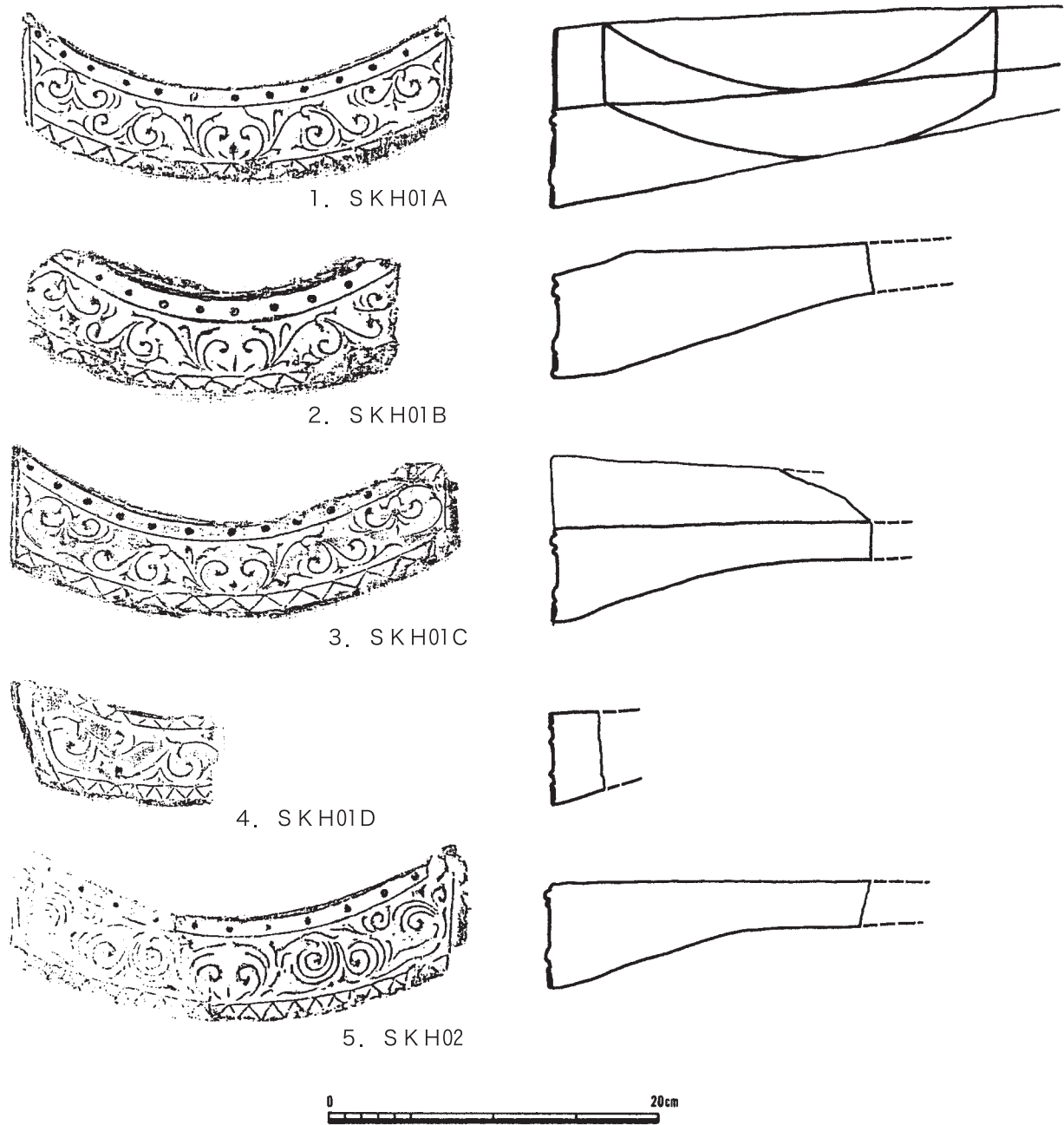
ところが、S K H01B・Cについては、これまでの編年に疑問があることから^{註8}、ここでは今後の讃岐国分寺・国分尼寺研究の前提作業の一つとして、これら6種の軒平瓦をS K H01型式と総称し、型式学的に再検討してその変遷を明らかにしたい。

2. S K H01型式の文様の再検討

(1) S K H01Aの文様とその構成(第1・2・9図)

S K H01型式の軒平瓦の中で最初につくられたとされるS K H01Aは、均整唐草文をもつ内区と左右及び上下の外区からなる。左右の外区は狭く、文様をもたないが、上外区には13個の珠文、下外区には13個の上向きの線鋸歯文をもつ。内区の均整唐草文は対葉花文を中心飾とする。花文は擬宝珠形にふくらんだ蕾状で、花柄をもち、左右に萼片状の小葉が表現されている。また、花文は下外区の中央の線鋸歯文の頂部上に正しく位置し、花文の真上に上外区の中央の珠文を配置する(第5図1)など、厳密な構成をもっている。

唐草文は、背向する蕨手2葉を左右に2転させ、空間を双葉状あるいは「く」字状などの支葉で埋める。背向する蕨手2葉の分岐部分にはU字状の萼を置く。なお、2転目部分は左右とも上方から内側に向かう。文様は全体に厳密な構成をもちながら、唐草文は精緻でのびやかであり、美しい図柄の軒平瓦



第1図 讃岐国分寺跡出土のSKH01型式軒平瓦とSKH02型式（註2文献より）



1. SKH01A (1)



2. SKH01A (2)



3. KB202



4. SKH01C (1)



5. SKH01C (2)

第2図 讃岐国分寺跡・国分尼寺跡出土のSKH01型式の軒平瓦1 (縮尺不同)
(1・2・4・5 国分寺跡出土、3 国分尼寺跡出土)



6. SKH01B (1)



7. SKH01B (2)



8. KB203

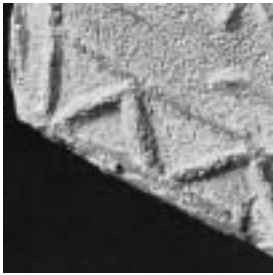


9. SKH01D (1)



10. SKH01D (2) 註9

第3図 讃岐国分寺跡・国分尼寺跡出土のSKH01型式の軒平瓦2 (縮尺不同)
(6・7・9・10 国分寺跡出土、8 国分尼寺跡出土)



1. SKH01A



2. SKH01C



3. SKH01B

第4図 線鋸歯文の変化（縮尺不同）

である。

(2) 外区文様（第1～4・9図）

SKH01Aの范型を彫り直したとされるKB202は、上外区をもたないものの、下外区には13個の線鋸歯文が正しく収まり、花文が中央の線鋸歯文の頂部上に配置されるなど、SKH01Aと同様のあり方を示す。

SKH01B・Cはともに上外区に珠文、下外区に線鋸歯文をもち、SKH01Aと同じ構成である。珠文はいずれも13個を数える。しかし、線鋸歯文をみると、SKH01Cは13個の線鋸歯文をもつものの、左右両端の線鋸歯文が内区の幅に収まりきらず、内外区を分ける縦線を越えて描かれている（第4図2）。SKH01Aの厳密な構成が崩れたとみることができる。

また、SKH01Bは線鋸歯文が12個に減っており、このため、中心飾の花文は線鋸歯文の間に配置されている（第5図4）。SKH01Bにみられる線鋸歯文の減少は、SKH01Cを経て変化したと考えることができる。

次に、KB203は上外区に珠文をもつが、下外区をもたない。KB203の珠文は17個に復元できることから、SKH01Bまで守られてきた上外区の珠文13個の

原則はここで崩れたとみることができる。

さらに、SKH01Dは上外区・下外区とも線鋸歯文をもつ。上外区に珠文を配し、下外区に線鋸歯文を配するSKH01Aの伝統は失われている。複数の破片を参考にとすると、線鋸歯文は下外区が約21個、上外区が約16個と考えられる。下外区の線鋸歯文はSKH01AからSKH01Bに至る変化を逸脱し、上外区はKB203の珠文を受け継がないことから、両者よりさらに変化したものとみることができる。

以上のように、外区文様からみると、SKH01A KB202 SKH01C SKH01B KB203 SKH01Dへと文様構成が崩れてゆく過程が認められ、時期差をもって変化したことが想定される。

次に、内区文様からこの結果の適否をみることにする。

(3) 内区文様

中心飾（第5図） SKH01型式の6種とも対葉花文を中心飾とする。花文は全て左右に萼片状の小葉をもつが、SKH01A・KB202・SKH01Cが花柄をもつ擬宝珠形を呈するのに対して、SKH01B・KB203・SKH01Dは紡錘形で花柄をもたない。

SKH01Cの花文はSKH01A・KB202のそれに比べて、寸詰まりであるなど僅かな差異が認められるが、6種の軒平瓦全体の花文を通じた一定の変化は認められない。SKH01B段階で新たな花文が採用されたと考えられる。



1. SKH01A



2. KB202



3. SKH01C



4. SKH01B



5. KB203



6. SKH01D

第5図 中心飾の変化（縮尺不同）

一方、国分寺跡の発掘調査で出土したSKH02（第1図5）は、蕨手2葉が渦巻き状に変化し、SKH01の文様系譜下にあると考えられているが、これに紡錘形の花文と萼片状の小葉が認められることから、SKH01A・KB202・SKH01Cの擬宝珠形花文は、SKH01B・KB203・SKH01Dの紡錘形花文より先行すると考えることができる。

また、下外区の線鋸歯文の変化を認めるならば、擬宝珠形花文はSKH01A・KB202からSKH01Cへと変化したとすることができる。

萼（第6図） 背向する蕨手2葉の分岐部分の萼をみると、SKH01A・KB202・SKH01Cでは基部がふくらみU字状を呈するが、SKH01B・KB203では中心飾の右側1個の萼のみU字状を呈するものの、他の3個はV字状に近く、SKH01Dでは開いた双葉状に変化している。

萼からは、SKH01A・KB202・SKH01C SKH01B・KB203 SKH01Dへの変化が考えられる。

蕨手2葉の先端（第7図） 6種とも、蕨手2葉の先端はふくらんでいる。しかし、先端のふくらみを詳しくみると、SKH01A・KB202・SKH01Cでは正面観が瘤状にふくらんでいるが、SKH01B・KB203・SKH01Dでは円形にふくらみ、より単純化されていると考えられる。

左上端部の支葉（第8図） 唐草文の変化の例として、瓦当面に向かって左上端部に施された外湾する支葉を取り上げよう。SKH01A・KB202では中央部で屈曲するように強く外反している。

SKH01Cでは、SKH01A・KB202と比べると全体に外反がやや弱くなっている。



1. S K H01A



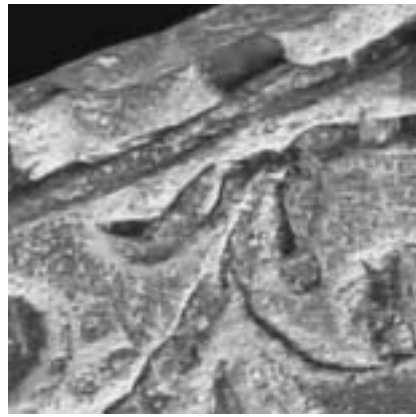
2. K B202



3. S K H01C



4. S K H01B



5. K B203



6. S K H01D

第6図 萼の変化（縮尺不同）

S K H01Bになると屈曲が非常に弱くなると共に、S K H01A・K B202・S K H01Cでは支葉の外側にあった棘状突起部が内側に变化している。

次に、K B203になると細い線で円弧状に外湾すると共に、先端が内側に屈曲する。先端の屈曲はS K H01B（第8図4）にもわずかに認められることから、これが变化したものと考えられる。

さらに、S K H01Dでは、同じく細い線で表現された支葉はほとんど内湾せずに上方に伸びている。

このように、左上端部の支葉は、S K H01A・K B202 S K H01C S K H01B K B203 S K H01Dへの変化が想定されるのである。

その他 以上のほか、S K H01A・K B202・S K H01Cでは唐草文の線がシャープなことから全体的に精緻で整った印象を受けるが、S K H01B・K B203・S K H01Dでは、やや粗い印象を受ける。このことについては胎土・焼成も考慮しなければならないが、文様が崩れたことの反映とも考えられる。

以上のように、内区文様からみても、S K H01A・K B202 S K H01C S K H01B K B203 S K H01Dへと連続的に变化したことを想定することが可能である。

また、上外区をもたないK B202は、S K H01Aを簡略化したものとして考えることができることから、S K H01A K B202への変化が考えられる。

3. S K H01型式の編年

S K H01型式の軒平瓦は外区文様、内区文様ともS K H01AからS K H01Dへの変化が想定できたが、



1. S K H01A



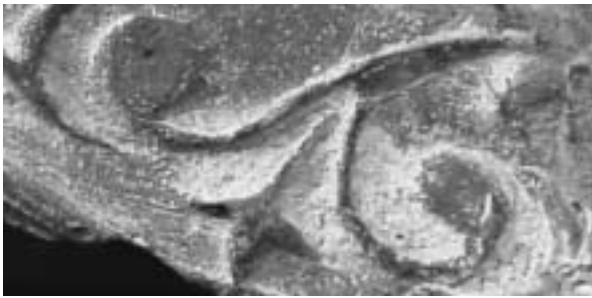
2. K B202



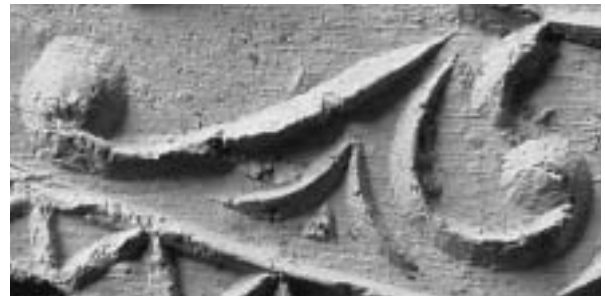
3. S K H01C



4. S K H01B



5. K B203



6. S K H01D

第7図 蕨手2葉の先端の変化（縮尺不同）

文様の変化の方向が想定どおりか否かについて、出土状況から確認しておきたい。

昭和58年度から平成3年度にかけて実施された特別史跡讃岐国分寺跡の発掘調査は国分寺の伽藍北部を中心に行われ、S K H01型式の軒平瓦が多量に出土した。報告書によると、S K H01Aが96点、S K H01Bが114点、S K H01Cが107点、S K H01Dが1点出土したとしている^{註10}。国分寺ではS K H01A・B・Cの出土量が圧倒的に多い。

国分尼寺では大規模な発掘調査が実施されていないため、軒平瓦の詳細な使用状況は分かっていないが、K B202は国分寺から出土せず、国分尼寺で用いられたものと考えられている^{註11}。また、国分寺からの出土がみられないK B203については出土量も少なく、現在のところ、国分尼寺で多量に用いられた形跡も認められない。

従って、讃岐国分寺跡、国分尼寺跡ではS K H01A・B・C・K B202が圧倒的に多く、K B203・S K H01Dは極めて少ないと考えられる。このことは、S K H01A・B・C・K B202が「創建時」の施設に主体的に用いられ、その後、大量の瓦を必要としない部分的な補修用などとしてK B203・S K H01Dが用いられたことを示しているであろう。

従って、S K H01A・B・C・K B202は、K B203・S K H01Dより先行し、全体としては、先述したように、S K H01A K B202 S K H01C S K H01B K B203 S K H01Dへと変遷したと考え



1. S K H01A



2. K B202



3. S K H01C



4. S K H01B



5. K B203



6. S K H01D

第8図 左上端部の支葉の変化（縮尺不同）

られる。

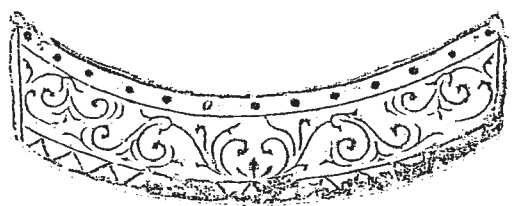
S K H01型式の変遷図は第9図のとおりである。

4. まとめ

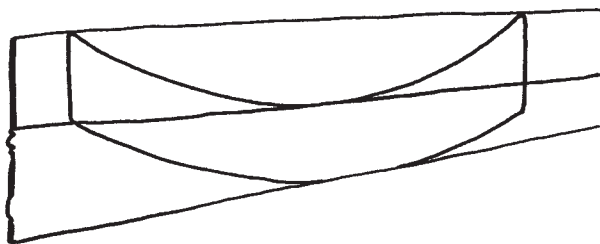
讃岐国分寺最古に位置づけられるS K H01Aは上外区に13個の珠文、下外区に13個の線鋸齒文を配し、中央の珠文・線鋸齒文と内区中心飾の花文を縦軸に合わせるなど、厳密な構成もち、内区に精緻でのびやかな均整唐草文を配した軒平瓦であり、創建時の宗教的息吹すら感じさせる優品である。

K B202は上外区（珠文帯）を省略するものの、S K H01Aの忠実な彫り直しであり、国分寺から出土しないことから、これまでの想定どおり、国分尼寺の創建のためにつくられたものと考えられる。珠文帯以外の文様内容及びその構成がS K H01Aと酷似することは、S K H01Aにあまり遅れることなく製作されたことを示すものと考えて良い。

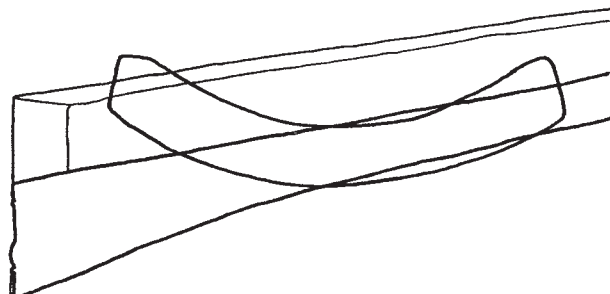
この両者に続くS K H01Cは花文が寸詰まりになり、線鋸齒文の両端が内区の幅を越えるなどの変化



1. SKH01A



2. KB202



3. SKH01C



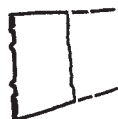
4. SKH01B



5. KB203



6. SKH01D(1)



7. SKH01D(2)

第9図 讃岐国分寺跡・国分尼寺跡出土SKH01型式の軒平瓦
(1・3・4・6・7 国分寺跡出土、2・5 国分尼寺跡出土)

も認められる。しかし、全体としてS K H01Aの文様の細部まで比較的忠実に再現していることから、S K H01A・K B202との時期差は大きくないものと考えられる。

S K H01Bは線鋸歯文が12個に減少し、紡錘形の新たな花文を採用すると共に、萼をV字状につくり、蕨手2葉の先端のふくらみを円形に単純化するなど、比較的大幅な文様の変化、簡略化が認められる。国分寺では、S K H01A・S K H01Cに近い大量の出土量が認められることから^{註12}、寺の施設に主体的に用いられたことは疑いないが、文様の変化が大きいこと、文様が比較的粗雑なことから、S K H01A・S K H01Cとはやや異なる使用をされた可能性がある。

K B203は下外区の線鋸歯文を省略し、上外区の珠文を17個に増やしている。内区文様はS K H01Bと大きく異ならないが、前述した左上端部の支葉の変化のほか、蕨手2葉の先端のふくらみが強調され、左右両端の蕨手2葉の下にある3葉状の表現を簡略化するなどの変化も認められる。

最後のS K H01Dは上下外区とも線鋸歯文をもち、上外区の珠文が消滅する。線鋸歯文は上外区が約16個、下外区が約21個と考えられ、基本の13個から大きく変化している。また、萼は開いた双葉状になるなど、文様細部の変化も認められる。

K B203・S K H01Dとも出土量は少なく、補修用の瓦と考えられる。

ところで、国分寺跡の報告書では北面・東面築地にS K H01Cが用いられたとしているが、当初からS K H01Cが主体的に用いられたとすると、この部分の築地はやや遅れて完成したことになる。

また、府中・山内瓦窯跡で発見されている最古の軒平瓦はS K H01Cである。瓦窯跡群全体については、現段階では不明な部分が多いが、国分寺の「創建時」から操業していることは明らかである。府中・山内瓦窯跡については稿を改めて取上げたい。

（註）

- 1．本文中の「国分寺」は国分僧寺をいう。
- 2．国分寺町教育委員会『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』1996
- 3．高松市歴史資料館『第11回特別展 讃岐の古瓦展』1996
- 4．国分寺町教育委員会『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和59年度発掘調査概報』1985
- 5．国分寺町教育委員会『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和60年度発掘調査概報』1986
- 6．註2に同じ。
- 7．安藤文良「讃岐古瓦図録」『香川県文化財協会報』特別号8 1967
川畑迪編『坂出市史』資料 1988
- 8．渡部明夫「平行叩き目をもつ讃岐国分寺創建時の軒平瓦」『香川史学』30 2003
- 9．大塚勝純・黒川隆弘『讃岐国分寺の瓦と埴』1970からの転載
- 10．註2に同じ。ただし、この数量に関しては、註8に記したように再確認が必要と考えている。
- 11．註2に同じ。
- 12．註8に記したように、国分寺資料館で筆者が確認できた範囲でいうと、S K H01Aが100点、S K H01Cが102点、S K H01Bが67点であった。

本稿をまとめるにあたって、多くの方にご指導、ご協力をいただいた。とりわけ、香川の寺院跡・瓦研究の先駆者である安藤文良氏には様々なご教示をいただくと共に、氏の拓本・実測図（第9図4・5・7）を使用させて頂いた。また、法華寺吉本正文氏、米崎旭氏には、ご所蔵の瓦を本稿で紹介させて頂いた。甚深の感謝を申し上げたい。さらに、国分寺町松本忠之氏、国分寺資料館植松みち子・後藤力氏、川畑迪氏、坂出市教育委員会今井和彦氏、善通寺市教育委員会笹川龍一氏、鎌田共済会郷土博物館森山修二・西川桂子氏、香川県埋蔵文化財調査センター加納裕之・中里伸明氏からもご教示・ご協力を頂いた。末筆ながら、厚くお礼申し上げたい。

讃岐国分寺創建軒平瓦の型式学的再検討

渡部明夫

8世紀中頃、聖武天皇によって創建された讃岐国分寺は、現在、香川県綾歌郡国分寺町国分に遺跡が残り、特別史跡讃岐国分寺跡として保護されている。

1983年から1991年まで実施された発掘調査は、讃岐国分寺の寺域、伽藍配置、僧坊の規模・構造・変遷、瓦の様相・変遷などの解明に大きな成果をもたらした。

瓦については豊富で多様な文様をもつ軒瓦が多く出土し、古代に限っても25形式29種の軒丸瓦と21形式25種の軒平瓦が確認され、年代決定の基礎資料として重視されている。

それらの瓦の一つ、讃岐国分寺創建時の軒平瓦とされるSKH01型式は、報告では4種（A～D）に区分され、A B C Dへと変化したとしているが、型式学的な再検討の結果、A C B Dへと変化することがわかり、従来の見解に修正が必要となった。

Restudy On The Typology Of Eaves Plain Tile In Sanuki Kokubunji

Akio Watanabe

Sanuki Kokubunji Temple was constructed according to Syoumu Astronomical Phenomenon in the middle of 8th century. The ruins are in kokubun, Kokubunjityo, Ayauta County, Kagawa Prefecture and are protected as Sanuki Kokubunji Temple, one of the special historic sites.

The investigation of excavation in the period between 1983 and 1991 obtained the great success in elucidation of the region of Sannuki Kokubunji Temple, arrangement of buddhist temples, the scale, structure and change, tile style and the tile change.

As for the tiles, the eaves tiles with all kinds of patterns were excavated. Only for the tiles in the ancient time, 25 forms and 29 kinds of eaves channel tile and 21 forms and 25 kinds of eaves plain tile are confirmed and are regarded as the important fundamental materials to decide date.

One of these tiles, SKH01 form, eaves plain tile in the period of establishment of Sanuki Kokubunji Temple, were classified into four kinds(A-D) and were reported to change as A B C D. However, after the restudy on typology, we knew it changed as A C B D. The former conclusion shall be revised.

建造赞岐国分寺用的轩平瓦的类型学重新研究

渡部 明夫

在第 8 世纪中期由圣武天皇创建而成的赞岐国分寺的遗址保留在现在的香川县绫歌郡国分寺町国分、被作为特别历史遗迹赞岐国分寺而受到保护。

从 1983 年到 1991 年实施的发掘考察、为探明赞岐国分寺的寺院领域、伽蓝(Buddhist temple)配置、禅房规模、构造与变迁、以及瓦的式样与变迁等、带来了重大的成果。

有关瓦的方面、出土了许多带有各种各样花纹的轩瓦(eaves tile)、单是古代就有 25 种形式 29 个种类的轩槽瓦(eaves channel tile)和 21 种形式 25 个种类的轩平瓦(eaves plain tile)被确认、并被作为划定年代的基础资料而受到重视。

在这些瓦中、有一类被定为赞岐国分寺创建时所用的轩平瓦 SKH01、在报告中被划分为 4 种(A ~ D)、并被认为是按 A → B → C → D 的顺序变迁的。但经过类型学方面的重新研究、结果显示应该是按 A → C → B → D 的顺序变迁的、因此、对以往的见解有必要加以修正。

사누키 고쿠분지 창건 현평와 (軒平瓦) 의 형식학적 재검토 와타나베 아키오

8 세기 중순, 성무천황 (聖武天皇) 에 의해 창건된 사누키 고쿠분지는 현재
가가 와현아야우타군 고쿠분지초 고쿠분에 유적이 남아 있고, 특별 사적
사누키 고쿠분지 자취로서 보호되고 있다.

1983 년부터 1991 년까지 실시된 발굴 조사는 사누키 고쿠분지의 사역,
가람 배치 (伽藍配置), 승방 규모 · 구조 · 변천, 기와의 영상 · 변천 등의 해명
에 큰 성과를 가져왔다.

기와에 대해서는 풍부하고 다양한 문양을 가지는 현와가 많이 출토되고,
고대에 한해서도 25 형식 29 종의 현환와와 21 형식 25 종의 현평와가
확인되어 연대 결정의 기초 자료로서 중시되고 있다.

그라한 기와의 하나, 사누키 고쿠분지 창건시의 현평와로 불리는 SKH01
형식은 보고에서는 4 종 (A ~ D) 으로 구분되어 A → B → C → D 로 변화
했다고 하자만, 형식학적인 재검토의 결과로 A → C → B → D 로 변화하는
것을 알았고, 종래의 견해에 수정이 필요하게 되었다.